

1995年 春 季 大 会

6月17日(土)・6月18日(日) 国際基督教大学 三鷹市大沢3-10-2

— プ ロ グ ラ ム —

第1日目	13:00~16:30	シンポジウム
	17:00~18:30	定例総会
		(この時間帯、非会員の皆さまにはビデオ上映(3本予定) 『エイズの授業』『避妊』『排卵と受精—安全日について考える』)
	18:45~20:45	懇親会
第2日目	10:00~11:45	個人研究発表(5題)
	11:45~13:00	会員懇談会(弁当実費・大会議室)
	13:00~15:00	ワークショップ(4題)

※カナダからドロシー・スミスさんが来日中で、懇親会などには出席される予定です。

第1日目：6月17日(土) 13:00~16:30

シンポジウム「フェミニズムと国家 — おんなと戦争責任 —」

パネリスト 上野千鶴子、加藤春恵子、田端 かや
コーディネーター 金井 淑子

●懺悔でもなく、告発でもなく

～「私」の「現在」を通して“国家”と向き合う～

金井 淑子(長岡短期大学)

今年、戦後50年、そして北京での第4回世界女性会議の開催の年である。「慰安婦」問題も、「在日」の処遇をめぐっても、さらに「開発や援助」を通してのアジアとの関係についても、いずれも過去・現在を通しての国家とわれわれの関係を問いつつ突きつけている。学会としても今春季大会で「フェミニズムと国家」のテーマを取り上げる。おんな・アジア・国家・軍隊・慰安婦・戦争責任といった具体的な問題のなかで、しかしこれらの問題を原理的に問う視点として、フェミニズムと国家・ナショナリズムの関係性が、あるいは権力の問題が不可避的な課題となっていると考えるからである。また、そ

れは必ず、第二波フェミニズムの獲得した「パーソナル・イズ・ポリティカル」のスローガンを突きつめたところにある課題ともつながっているはずである。日本人として、おんなとして、痛みを伴わずしては向き合うことの難しい問題ではあるが、これらの課題を取り上げ真摯な議論をしておくことが、北京大会への参加も少なくないと予想される会員諸姉にとって意味あることと考えている。活発な討論の場を期待したい。

●フェミニズムはナショナリズムを超えられるか？

上野 千鶴子(東京大学)

80年代以降の、世界史的な国民国家の解体期にあたって、近代の産物にほかならぬ国民国家とは何か？ ということが今日的なテーマになってきている。フェミニズ

ムもまた近代の産物であるが、その近代批判を通じて、近代を超えられるかどうか問われている。

歴史的に見て、日本の第一波フェミニズムは、平塚らいてうの母性主義も市川房枝の女権主義も、女性の国家への貢献を通じて「女性の権利」の拡張を目指してきた。日本ファシズムと日本のフェミニズムとの共犯関係については、このところ反省的女性史による読み直しが精力的に行われている。女性は戦争のたんなる受動的な被害者だったのではなく、積極的な加害者でもあった。

湾岸戦争と女性兵士、国連PKOへの女性の参加等をめぐって、国家が組織する暴力と女性との関係は、けっして過去のものになっていない。フェミニズムはナショナリズムを超えられるか？を課題として論じてみたい。

●心情的アナキズムと加害の構造

—現代日本におけるフェミニズムの陥穿—

加藤 春恵子(東京女子大学)

いま日本人は、「国家」の過去を自らのものとして引き受け、現代もなお持続している「加害の構造」を変革しつつ、被害を与えた国々の「個人」に対する謝罪と賠償を自らの「国家」に行わせる責任を負っている。しかし日本人、とりわけて60年安保以後に自らの思想を形成した人々、なかでも女性の意識構造・深層心理構造のなかには、「国家」を引き受けることを嫌う拒否反応が根強く働いており、このことが「加害の構造」を持続する要因の一つとなっていると私は考える。

第2日目：6月18日(日) 10:00~11:45

個人研究発表要旨

●国家・リベラリズム・ラディカルリズム

—公私の二元論区分について考える—

細谷 実

コーディネーター 岩本 美砂子

リベラリズムのオリジナルな構成原理の一つに公私の二元論区分というものがある。

1. この二元論区分が女性差別を支える一つの原理であると言われているが、どうしてそうした話になるのか。そここのところの仕組みについて改めて考えてみる。
2. リベラル・フェミニズムは、この二元論区分を引き継いでいると言われるが、果たして本当のことなのか改めて考えてみる。
3. その二元論区分を批判し解体しようとするのが、ラディカル・フェミニズムやマルクス主義フェミニズムだと言われるが、その解体ということの中身は具体的には何なのか改めて考えてみる。
4. フェミニズムに対する国家の位置づけを考え、リベラル・フェミニズムを部分的に擁護する。

以上を、フリーダ、アイゼンシュタイン、エルシュタイン、マッキノンなどの主張を参照しつつ論じたい。

私自身の経験を出発点として、こうした「自明性」のありようを考察し、個人と国家の関係をフェミニズムの立場から検討し、「国家」への拒否反応の源泉を明らかにして、女たちがコミットすることのできる脱家父長制政治システムの未来像を模索しつつ、「従軍慰安婦」問題を受け止め、アジアの女性たちと向き合っていくために必要な道筋を検討する。

●植民地の朝鮮で暮らした日本女性たち

田端 かや(梨花大学大学院)

50年前まで日本の植民地支配下にあった朝鮮半島で何が行われたかについての研究は、最近になってわずかながらも出てきた。特に女性と戦争に関しては、日本軍慰安婦をめぐる研究が多方面からなされている。目を覆いたくなるような非人道的行為は、たしかに衝撃的だが、それが植民地支配の全体ではない。もっと静かに日常生活に植民地支配は深く入り込んだ。

当時、日本女性たちはさまざまな思いを胸に海を渡り、「外地」朝鮮での生活を体験した。育児、家事、近所付き合い、買い物などの日常を植民地で過ごしたその多様な体験を聞くと、歴史はリアリティをもって迫ってくる。

年老いた自分の一生を振り返るとき、植民地体験は一人の女性として引き受けるにはあまりに重すぎるが、彼女たちのさまざまな境遇での体験や植民地支配についての思いを通して、日本国家が犯した植民地支配を明らかにし、平和を目指す私たちが学ぶべきことを探る。

●合衆国の教科書に見られる男女平等とその限界

—中等教育レベルの社会科の教科書から—

村上 郷子

コーディネーター 桑原 糸子

合衆国では、各レベルの法律によって、性を理由に学校が生徒を差別することを禁じている。従来性差別の正当化理由として挙げられてきたものは、法律の上では徐々に説得力を失いつつある。しかし、教科書における性役割分担の強調、男性優位のイラスト、あるいは女性のステレオタイプ化(家事をする母親、男性の補助役としての女性など)は、多くの研究者が指摘している。最近の教科書の中における性差別は改善されつつあるというが、実態はどうか？

報告では、中等教育レベルの社会科の教科書を分析しながら、法律上の平等と事実上の不平等という問題について、何がどう改善されたのか/されなかったのか、後者の場合に何が問題なのか、検討する。着目点は、イラストの中での女性の役割、性役割分担の強調の度合い、または文章表現での女性のステレオタイプ化の度合い、などである。

●フェミニスト・アートにおける運動及び研究動向 —1970年以降のフランスと日本—

梶本 玲子

コーディネーター 金井 淑子

フランスのフェミニスト・アートは、1970年代に女性解放運動(MLF)に参加した女性アーティストたちが中心になって行われた。これらの運動は、81年の社会党政権誕生を期に衰退した。その後、社会・人文科学等の女性研究者が、女性研究やフェミニスト研究を担ったのに対して、フェミニスト・アートではそのような展開があった。ところが90年代になると、パリの国立高等美術学校によるセミナー開催、M.J. Bonnetのグループによる作品の調査等、フェミニスト・アートが再び研究のテーマに取り上げられるようになっていく。

日本では、76年にL. Nochlin著「なぜ女性の大芸術家は現れないのか」が翻訳されて以来、翻訳を通して、フェミニスト・アートが紹介されてきた。90年代になると、日本女性学研究会、美術史学会、日本学会議等で、フェミニスト・アートが取り上げられ、また、80年代後半からAWACや女性とアートプロジェクト等の女性グループの運動を活発になっている。

本発表では、フランスと日本のフェミニスト・アートの運動・研究の動向及びそれぞれの特徴を明らかにする。

●レズビアン・フェミニズムってなに？

富岡 明美

コーディネーター 渡辺 和子

分かっているようで分からないレズビアン・フェミニズムの解明を試みる。

アメリカのレズビアン・フェミニズムの現在から過去に遡り、レズビアン・フェミニズムが歴史のどの時点で誕生し、ど

のような理論構築が行われていったのかを追う。そして、その理論が内包する問題点のために、レズビアン・フェミニズムがどのような方向に進み現在に至ったのかについても触れたい。

1970年代に確立し、それ以来欧米のフェミニズム運動の先鋒に立ってきたレズビアン・フェミニズムを、90年代も半ばになった今整理しなければならない事情は、一方ではレズビアン・フェミニズムを周縁に追いやってきた日本のフェミニズムの現状と、もう一方ではレズビアンを不可視する社会で生きる日本のレズビアン・フェミニズムの現状がある。このような現状をふまえ、発表後のディスカッションにおいては、本音でレズビアン・フェミニズムやヘテロセクシュアリティについて語り合いたいと思っている。

●絵本に見られるジェンダー表現

福田 豊子

コーディネーター 北沢 杏子

幼児期は、性アイデンティティーの基礎が形成される時期である。ジェンダー形成に係わる情報源は多様だが親や保育者のもつ男女観や、メディアの描く男女像が特に大きく影響を与えると思われる。

幼児が接するメディアには、テレビや絵本・童話などがあるが、絵本は親や保育者が選択して読み聞かせることもあり、親や保育者のジェンダー観が反映しやすい。

絵本を通じての幼児のジェンダー形成を明らかにするために、まず絵本に描かれた表現を分析することにした。具体的には、市立図書館などに備えられている絵本を取り上げ、どのようなジェンダー表現がなされているか調査する。できれば更に、親や保育者がどのように絵本を選択するか、幼児たちがそれをどう受け止めるかという点についても報告したい。

第2日目：6月18日(日) 13:00~15:00

ワークショップ

●Feminist Pedagogy：理論とその実践

藤村 久美子

コーディネーター 内藤 和美

女性学は既成の学問分野における内容だけではなく、それらに伴う教育方法—教授法、授業形式、教師と学習者との間の関係及び役割分担等—に対する批判として起こった。フェミニスト教育学(feminist pedagogy)の原理に沿った教育方法を試みる上で一つ最も大きなチャレンジは従来の先生を中心とした知識伝達式教授法を拒否し、「先生」「学習者」という枠を破り、今までと違った教育内人間関係、学習姿勢、及び役割意識を育てていくことである。また、そうしたうえで、クラスの参加者全員と一緒に授業をつくりあげていくことを目指すことであると言える。

今回のワークショップでは、過去6年間女子大で女性

学及び教育学関係の授業を担当した経験、また今まで学生に書かせた授業に関する感想評価を基にして、実際の授業においてfeminist pedagogyを展開させていく方法及び問題点について参加者の皆さんと意見や経験談を交換しながら考えたいと思う。

●キャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメント

渡辺 和子

コーディネーター 加藤 春恵子

セクシュアル・ハラスメントという性差別の問題に対して、女性学の視点からどのように分析し、また対策をつくっていけるだろうか。特に日本女性学会では何ができるだろうか。

キャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメントの問題が京大の矢野事件をきっかけに昨年から注目されてい

る。昨年の春季大会では、提言書を作成し、文部省に提出し、セクシュアル・ハラスメント対策がいかに教育の場でも重要であるかを訴えた。

今回も引き続き、学校におけるセクシュアル・ハラスメントの現状を話し合うとともに、その土壌となっている学校における性差別の実態を把握し、性差別に対する対策を女性学の立場から具体的に考えていきたい。

●女性と政治：中国女性学の場合

秋山 洋子

コーディネーター 井上 輝子

中国は日本とまったく違う政治状況におかれた国である。マルクス・レーニン主義が国の指導思想とされ、あらゆる教育・研究機関が国家と党の指導下におかれている。女性運動も例外ではなく、全国組織である中華全国婦女連合会が一手に握っている(北京会議でNGOの受入団体になるのはこの婦女連である)。

このような国の中で、自主的な女性学の研究をこころざし、自分たち自身の組織を作ってしまった女性たちがいる。それはどうして可能になったのか。中国女性学の創始者、李小江の論文「公共空間の創造」を紹介しながら、中国の女性と女性学の現状について話し合いたい。

北京会議に向けて、いろいろな問題を持ち寄り、情報交換をする場にしたいので、積極的な参加を歓迎する。

特にアピールや報告をしたい方は、秋山または司会の井上輝子さんまで連絡を……。

●女性センターにおいてフェミニズムは可能か

——市民としての女性の参加を中心に——

船橋 邦子・西山 千恵子

足立区女性行政研究会

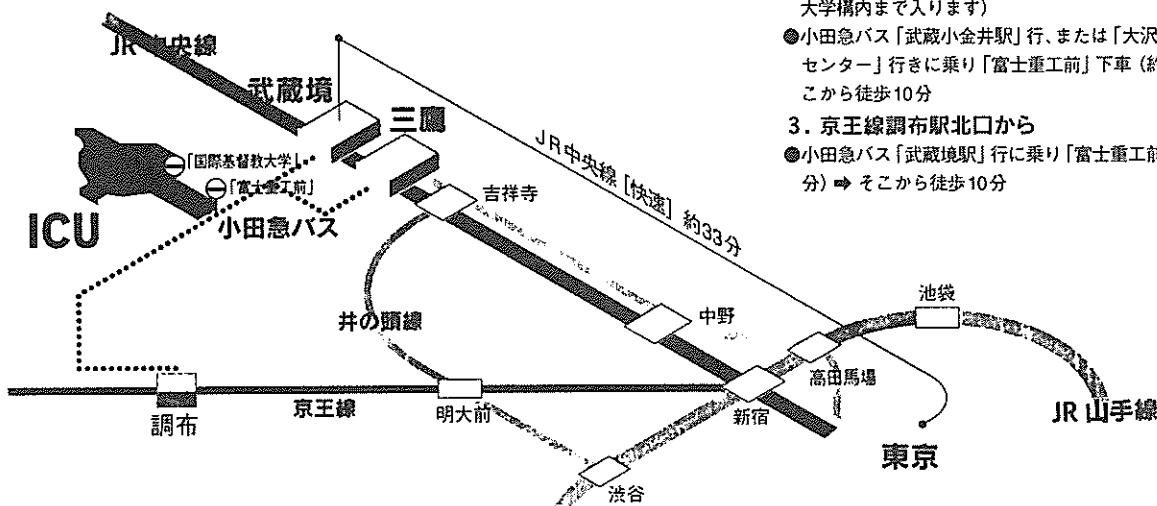
たいとう女性ネットワーク有志

コーディネーター 漆田 和代

各地の自治体で女性行政が進められているが、その一つの拠点となる女性センターは、果たしてどのように機能しているのか。それはフェミニズムとの整合性を保っているか、そしてどのような問題を抱えているのか。女性センターにおける旧来の地域婦人団体の位置づけや、また女性行政そのものに対してフェミニズムはどう距離をとるのか、さらに性差別の解消を阻む多くの障害や女性政策の総合化に壁となる諸問題を打破する役割を果たす、よりよい女性センターをつくるために市民としての女性は何ができるのか。

各地域でそれぞれの女性行政、センターに係わりながら活動をする女性たちが集まり、「先進的」と宣伝される足立区的女性センターの事例を含め、東京近辺の女性センターのあり方を検討する。そして女性市民の立場からセンターの問題点と展望を探りたい。

交通案内図



1. JR 武蔵境駅南口から

●小田急バス「狛江営業所」行、または「吉祥寺駅」行に乗り「富士重工前」下車(約10分)⇒そこから徒歩10分

2. JR 三鷹駅南口から

●小田急バス「国際基督教大学」行に乗り終点下車(約20分、大学構内まで入ります)

●小田急バス「武蔵小金井駅」行、または「大沢コミュニティセンター」行きに乗り「富士重工前」下車(約20分)⇒そこから徒歩10分

3. 京王線調布駅北口から

●小田急バス「武蔵境駅」行に乗り「富士重工前」下車(約20分)⇒そこから徒歩10分

※今大会に関するお問い合わせは田中かず子氏宛(TEL.&FAX. 0423-38-7502)に直接お願いします。

〈宿泊について〉

会場校最寄りのホテルです。ご希望の場合は各自でご手配下さい。

●ホテルメッツ(JR武蔵境駅 徒歩・1分)

シングル9,000円

☎ 0422-32-5111

●ホテルベルモント(JR三鷹駅 徒歩・3分)

シングル9,000~9,500円 ☎ 0422-71-3311